

PB-218

呼吸サポートチーム (RST) の取り組みと今後の課題

石巻赤十字病院 臨床工学技術課¹⁾、看護部²⁾、リハビリテーション課³⁾、栄養課⁴⁾、薬剤部⁵⁾、呼吸器内科⁶⁾
○熊谷 一治¹⁾、佐藤 貴史¹⁾、澁谷 多佳子²⁾、藤井 静香²⁾、佐々木 隆洋³⁾、奈良坂 佳織⁴⁾、追木 正人⁵⁾、花釜 正和⁶⁾

当院では2007年に呼吸器内科医師を中心とした他職種で構成する呼吸サポートチームを立ち上げ、2010年よりすべての人工呼吸器装着患者へ週1回のラウンドを開始した。ラウンドは、呼吸サポートチームメンバーの医師、看護師、PT、CE、薬剤師、管理栄養士で行い、人工呼吸器離脱に向けた支援と提案、人工呼吸器使用状況の確認などを行っている。毎月の定例会議でラウンド状況、人工呼吸器の安全管理や使用材料などについて検討して院内スタッフへ情報の発信や呼吸ケアに関する情報が院内で閲覧できるように呼吸サポートチームのホームページを開設した。また、入院患者の呼吸療法と呼吸ケアに関する知識と技術の習得を目的に呼吸ケアに関する研修会を企画、開催している。2013年度より、従来行ってきた人工呼吸器装着患者へのラウンドを中心に行ってきたチームを急性期チーム、新たに重症慢性呼吸器疾患患者への介入を行う慢性期チームを立ち上げ活動を開始、2014年度より評価管理システムの導入し運用を開始した。今後の課題としては、呼吸ケアに関連する口腔ケアチームとの連携、研修会受講者の要望を取り入れた研修内容検討しての対応、評価管理システムのデータ活用したチーム活動への取り組みが必要である。

PB-220

当院 RCT の活動の実際と今後の課題

武蔵野赤十字病院 看護部

○石田 恵充佳、小林 圭子

【とりくみの背景と目的】2010年の診療報酬改定時に呼吸ケアチーム加算が新設されたことに伴い、当院でも呼吸ケアチーム（以下RCT）が発足した。RCTのアウトカムは、『一般病棟での人工呼吸器装着期間の短縮・人工呼吸器装着中患者の安全管理とケア向上』だが、RCT活動の実態は施設のニーズにおいて様々であり、施設間で差異を認めている。当院では人工呼吸器装着患者以外に、呼吸に関わる全般に関しての相談や教育、指導の機会が多くなり、病院ニーズに応じた活動へと内容を変化・拡大した現状がある。そこで今回は、当院のRCT活動と今後の課題を報告する。

【実際】主な活動は、患者への直接実践と間接的な環境調整に分けられる。前者は、1)人工呼吸器設定の確認と病態に応じた設定や離脱・抜管に関する提案、2)全身状態の評価や鎮静・鎮痛剤など使用薬剤の効果と評価、3)体位管理など呼吸ケアに関する提案・指導を中心としたラウンド、後者は、1)呼吸に関連した勉強会の開催、2)安全面・患者の快適性の向上につなげられるような機材の検討・変更・指導である。チーム発足後から2013年3月までのラウンド件数は215件、人工呼吸器離脱率73.4%であった。発足後から対象患者は3倍増加し、離脱率も増加した。実際には、人工呼吸器管理やケアに関してRCTがリソースとして活用されたことで、異常の早期発見、およびインシデントの回避につながった事例もみられた。

【今後の課題】RCTに対する当院のニーズは一般病棟で人工呼吸器を使用している患者に限らず、患者の安全性・快適性の向上など呼吸に関連した全般であることが考えられ、今後も引き続きそのニーズに応じられるように活動内容を柔軟に変化させていくことが望ましい。合わせて、メンバーの活動頻度やRCTの時間の確保など、より柔軟で迅速に対応するための効果的な活動方法などを幹部管理者と検討したい。

PB-219

当院 RST 活動の現状と実態調査

大分赤十字病院 ICU

○片岡 未来、丸野 祐輔、大野 智之、重永 武彦、横井 直美

【はじめに】大分赤十字病院は、第二次救急指定病院の役割を担っており、多くの重症患者の受け入れを行っている。そのなかで、集中治療を要する患者によりよい医療を提供できることを目指し2009年度にはICUが開設となった。しかし、ICUのベッド数は限りがあり、一般病棟でも人工呼吸器を装着中の患者が存在し、幅広い呼吸ケアが必要な現状がある。そのため、呼吸ケアの標準化と質の高い安全管理をめざして2011年9月にRSTが発足された。活動はSimple（誰もがわかるように簡潔に）Safety（安全な医療・ケアが提供できるように）Standard（ケアを標準化する）をモットーとし、人工呼吸器の早期離脱と入院期間の短縮、人工呼吸器関連のインシデント、アクシデントの減少、などをアウトカムとしてあげている。活動開始から3年目を迎え、現在の活動の評価を行い、今後の課題について考えたため、ここに報告する。

【方法】RSTの活動内容について看護師及び、臨床工学技士・リハビリテーション部を対象にアンケートを実施した。また、ヘッドアップ30度(QI)の実態調査を行い、チーム診療を行った患者の診療記録から後ろ向きに収集した情報と前述のアンケート調査、学習会実施後のアンケート調査等とあわせて分析し、RST活動の評価をした。

【結語】離脱困難な事例は転帰が死亡という事例が多くの割合を占めていた。当院RSTの活動の意義は人工呼吸器装着中患者の安全管理及びケアの向上にあると考え、今後もアウトカム評価だけでなく活動の過程の評価を行って質の向上を目指していく。

PB-221

災害看護委員会活動報告

－災害救護シリーズ研修を行っての評価－

日本赤十字社長崎原爆病院 看護部

○真辺 悟、増本 大祐、福島 明子

当院において、看護部の中に災害看護委員会が立ち上がってから昨年で3年目を迎えた。平成25年度の災害看護委員会の活動でメインであったものが、それまでは行っていなかった災害救護に関するシリーズ研修であった。この研修は、「災害救護を理解し、赤十字救護員として災害現場で活動できるスキルを習得する」ことを目的に、9月から1月まで毎月1回1時間ずつ、全5回行った。内容は1. 東日本大震災を振り返り赤十字活動を学ぶ、2. トリアージと主事の役割について、3. 1次トリアージについて、4. 2次トリアージについて、5. 救護所レイアウトの机上シミュレーションについて行った。研修担当は、主に災害看護委員会が担当したが、主事や薬剤師も講師に迎え、看護師だけでなく主事の役割も学ぶことができるように工夫した。参加は自己研鑽研修であるため自由参加とし、参加人数は延べ145名で、内訳は看護師133名、医師2名、薬剤師3名、検査技師3名、事務部2名であった。研修は、講義30分とグループワーク30分で構成した。本シリーズ研修全体の評価として、内容の理解は、「理解できた」・「やや理解できた」が95.3%、今後役に立つかについては、「役立つ」・「まあまあ役立つ」が94.7%であった。大きな災害救護研修ではなく、1時間という短い研修を複数回行ったが、興味があってもなかなか外部の災害救護研修に参加できない職員や、救護研修を受けてからある程度時間が経過した職員にとっても、良い学びの場となり振り返りの場となった。しかし、医師や主事になりうる対象の参加が少なく今後の課題である。災害救護について適宜振り返ることで、赤十字職員としての災害救護の心身の準備を整えていく機会になると思われ、本シリーズ研修を今後も継続させていきたいと考えている。